

# 遺物の復元

## — 彩をつくる —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



破片の状態



接合のすんだ状態



石膏復元の出来上がり

博物館・資料館などの展示や写真撮影に使われている土器などの遺物で、完全な形をしたものうち、多くは復元が施されている。実のところ、発掘調査によって出土する遺物は、ほとんどが破片の状態なのである。見慣れた人なら、土器などの破片からある程度の種類や形は判断することができるのだが、それだけでは全体がどんな形になっているのかとか、窯で焼いた際の焼き歪みによって形がどれほど変形されているのかなど、形状の上でもはっきりしたことがわかりにくい。そこで土器の破片から、本来あったであろう土器の姿に戻すという作業が必要になってくる。

調査で出てきた土器などの破片は水洗いし、いくつもの同じようなものや異なるものがいっぱい混

ざり合っている中から、土質や色調・厚み・表面の成形痕や仕上げの手法・文様などの特徴を参考にして、破片を同じ個体どうしに分けていき、そして、また同じ個体内で部位別に分け整理していく。次にそれを接着剤を使用して、ジグソーパズルをするようにつけていく。できるかぎり接合をして、破片の足りない部分については、石膏せっこうという材料を用いて復元をする。

石膏復元に使う石膏（歯科用石膏）とは、白い粒子の細かい材料で、水で溶かすと初めはミルク状からクリーム状に、徐々に固まっていく。5～10分間で完全に固まる性質をもつもので、強度も高い。これを遺物の足りない部分に入れて補っていく。

作業の段取りとして石膏を入れ

る前に、その石膏を受け入れる型がある。型は、粘土（陶土）を板状にして適度な大きさにカットして、石膏を入れようとする部分の内側から形を整えてあてがう。

石膏の入れ方としては、基本的には土器の欠けた部分の周囲から全体へと入れていき、必要などころまで石膏を盛る。

石膏が凝固したら、小刀などの道具を使って石膏を削って仕上げていく。削りは土器の実測図やその土器全体の特徴を考察して、全体的に形が一体化するように仕上げる。

このようにして石膏復元された土器に彩色をすることで、それが使われていたであろう当時の姿により近いものとして、私たちが目にすることができるのである。

(多田清治・村上 勉)

## 須恵器高杯の石膏復元

1 粘土で内型をとっているところ



2 ロクロ上のセッティング



3 ペインティングナイフで取り除いている



4 八分程度の仕上げ



5 細部までの仕上げ



6 出来上がり



**写真1** 高杯の口縁と同じ大きさの円形の台紙を、まず用意する。粘土で内型を作るには、実際に残っているところから足りない部分とよく似ている内側を探し、そこに粘土板を押しあてて型を取る。

**写真2** 口縁台紙を手回しロクロのビニールの下の中心に置き、粘土の内型を口縁台紙に合わせて置く。高杯を石膏で汚してしまわないために、汚れそうなところに水に浴かした粘土を塗っておく。そして高杯を台紙と粘土内型とに合わせて置き、位置を細かく調整する。石膏が流れださないように、粘土の帯を台紙の外側に平行に置く。

**写真3** 石膏を溶き、周辺から内型部分へと入れ込んで

いき、必要なところまで盛る。そして余分な石膏を、まだ軟らかな状態の時に取り除いておく。

**写真4** 残っている部分の特徴や焼き歪みによる変形を考察しながら、いろいろな小刀類を使って、八分程度の仕上げの削りをする。

**写真5** 細部の仕上げ削りは、残っている部分の成形痕や文様などを考察したり、実測図を参考に、全体的な形が一体化するようにする。

**写真6** 補修するところがあればその部分に石膏を入れて直す。そして耐水ペーパーで磨いて仕上げ、土器についた汚れを落として、乾燥させて石膏復元の過程を終える。